



皆川泰蔵

「いわくら」

上野 務

昨今よほど薄らいできたようだが、以前は「いわくら」というと、いささかさしきわりのある言外の意を伴っていた。小学生の頃から「あいっわ、く、らや」お前は岩倉ゆきや」などと言いまし、言われもしたものだ。先年、高校の文化祭を岩倉祭と改称した際、どうも具合が悪いじゃない

想

随

かという意見もあったりした。

もっとも同志社内でも、高校のことを岩倉で代用する場合も少なくない。正式の文書はともかく、ちょっとした書類などに「岩倉高校」などと書いてあることがある。これは、香里高校や女子高校などとの区別にいちいち「共学の高校」などというより「岩倉」とする方が簡単明瞭だからだろう。うちの生徒諸君はというと、岩倉という名に強い愛着を覚えているようで、文化祭も岩倉祭なら、生徒会機関誌も「いわくら」としている。

ところで、岩倉は実は「磐座^{いはくら}」で神の御座所という意である。今、実相院^{じつさういん}の北に石座神社^{いしざしんじ}があって、その東南に山住神社^{やまぞうしんじ}というのがあり、石座神社の御旅所となっているが、この山住神社こそほんとうの磐座である。山住は「山つ神」の意で、社殿はなぐ巨大な自然石をそのまま神座としている。岩倉は語源的には神聖清浄な意味合いの語なのである。王朝の歌集にも動きなき岩倉山に君が代を

運びおきつつ千世をこそ経め

(拾遺集・十・詠人しらす)

などと神祇の部に歌が見られる。

徒然草には次のような話が出てくる。ある時、女官たちが男性どもの返事の巧拙をためそうとして、参内してくる公卿たちをつかまえて「もうほとときずはお聞きになりましたか」とたずねたところ、さる殿上人が「たしか岩倉で聞きましたらう」と答えた。あまたの返事のなかで、これが気がきいており、いちばん評判がよかったという。岩倉には王朝貴種の山狂もあつたように、いわば風雅の地でもあつたのだろう。

それが時代くだつて近世では

岩倉の狂女恋せよほとときず 蕪村

となつてくる。その後、今に至るまで

岩倉や狂女の窓の返り花 田中王城
などと、岩倉での句といえは狂院・狂者を題材としたものとなっている。

過ぎし日はともかく、岩倉は今変貌しつつある。松カ崎の狐坂を考えると、国際会議場と相對峙してチャペルの赤屋根が目にしみる。比叡を背景にラグビーのボールもとぶ。広いキャンパスから若者たちの歌声も聞こえてくる。

野菊咲き明治の音の水車 那須乙郎

その「明治の音」も今や聞こえず、いささかの寂莫は禁じ得ないにしても、岩倉が久しく伴ってきた言外の言意語感、若く美しくたくましいものに置きかえられつつあるようだ。

(理事・高校教諭)

歴史のながれ

木村俊夫

歴史のながれ 旧きものを
返らぬ過去へ 押しやる間に
主イエスの建てし 愛の国は
民よりのみへ ひろがりゆく
これは本誌の読者には、しごくなじみ深いはずの讃美歌二三四番の一節である。私自身この歌を今までにもう何度感慨こめて歌ってきたことか。

さて、いつの頃からか、また私はこの歌にあるこだわりを持つようになっていたのである。くだいていえば、そのこだわりは時の流れの方向に關してである。

歌にあるように、歴史がながれであることをまず承認するとして、その中で「歴史のながれ」は「返らぬ過去へ」押しやる」とあるから、そのながれは過去へ向っていることになる。「旧きものを」とあるのは論理的には問題であるが、それは今とりあげぬとして、この歌にある、ながれ、について、さらにみてみよう。

右の一節はこの讃美歌の二番の歌詞である。そしてその一番では「昔主イエスの播きたまいし……生命のたね」が生長して「樹とはなりぬ」と結ばれている。明らかにこの「たね」と「樹」は歴史の形象化である。そしてここではもちろんその生成は過去から未来へ向っている。また三番の歌詞になると、「時代の風」が吹きたけて、「思想の波はあいう」っているが、「主イエスの国は」すべての物を超えてすすむことが宣言される。しかし、すすむ、とは一体どちらへなのか。未来へ、と答えるのが、常識には叶うであろうか。しかし、そうではないという理屈もたてられるような気もする。

なぜなぞめいた書き方になったが、実は

このながれの、正反対な二方向の可能性については、哲学者も心理学者もが、すでに指摘し、説明してくれている事柄である。

しかもなお私がこれにこだわるのは、二つのながれを可能にする論理自体ではなくて、その両方を同時にすんなりうけいれてしまふわれわれの心情のありかたなのである。大のおとなが、しかも知識人までもが、いいかげんに二つのながれを使いわけて、時を意識し、それを表現している。かと思えば、三歳の童児までもが、二つのながれを巧妙に使いこなすべをしごく樂々と体得して行く。この事実が私にはとても面白いのである。正に「時代の風」「思想の波」のめちゃんばげしい今時に、こんなことにこだわるのはのんびりしすぎていると叱られるであろうか。

「時報」の原稿締切りも迫ったので、右のようなことでも書いてみようと思いつつ、研究室からの帰途、ある寺の門前にこんな文字のはりだしてあるのをみて、とたんに私の心はうきうきしだしたものである。曰く、

あとは人 さきは仏に

まかせおく
中は極楽

おのが心の

—真信尼

(昭和15大文卒・文学部教授)

私学と入試

大塚 達雄

今年の入学試験は、多くの大学に大変な試験を与えた。その中であって、わが同志社大学は、とにかく平穩に入試を終えることができた。だが思わぬ事態が起ったのである。

文学部では従来実施していた入学選考方法（昨年十二月十八日の教授会で、前年より厳しくはするが、制度としては認めることに決定）が、入試判定教授会の日（二月二十三日）になって、社会学科からの緊急動議でくつがえされた。つまり、教職員子弟、同志社ファミリー（DF）の別枠選考を廃止、スポーツ推薦選手（SP）も結果的に全員不合格となった。この波紋は急激に拡がり、大きな波乱を巻き起して、つい

に同志社生え抜きの嶋田啓一郎先生を文学部長辞任に追い込んだのである。

私は緊急動議を出した社会学科の一員として、強く責任を感じ、該当者にはもちろんのこと関係ある多くの人々にお詫びしたい気持ちで胸がいっぱいである。また、この動議の背景を憂うるのである。それは、国立大学の在り方を模範的基準として、同志社大学をみなければならぬような雰囲気がかかなり強く作られていること、および、それを利用しようとした何ものかがあったことである。在来の別枠選考は、特別入学すなわち裏口・不正入学であるかのごとくきめつけてしまう考え方が根底にあったが故に、「緊急性」を振りかざせたのである。だいたい、英語・国語・選択（社会・数学）の三科目の合計得点だけで、点数の高い方から機械的に採っていくやり方自体がおかしいというのが、私のいつもながらの主張なのである。高校からの内申書は全く一顧だにされない。いったい何のために内申書を提出させるのか。入学後活用するのなら、合格後提出を求めればよいではないか。

入試の得点は、入学後の勉学状況や卒業後の活躍とは余り関係がない。社会学科の中でも、私の所属している社会福祉学専攻は、入学合格点もとても低いが、四年後に卒業できない者の数はごく僅かである。反対に、点数のもつとも高い某専攻は、今年も三分の一が卒業不可能であった。これは例年の傾向である。「福祉の先生の採点甘いからだ」と言われたこともある。調べてみればそうではなく、一般教育科目ですでにその差がみられるのである。

教職員子弟・DF・SPなど別枠選考で入った学生で、学業成績のきわめて優秀な者もいる。また全人格的に非常にすぐれ、クラスのよきリーダーとなっている者もみかける。さらに卒業後、素晴らしい働きをしている人々をたくさん知っている。

相当古い話になるが、学内高校以外の高校からも推薦入学で採っていたことがある。これは十数年前に廃止されたが、その理由を長老教授に尋ねても、推薦入学は何か悪いものだという印象が与えられるだけで、理由は釈然としない。やり方によって正されるような理由なのである。彼らの

中には素晴らしい学生がいたことを記憶している。

大学紛争で入試不可能、仕方がないから内申書で選考しようというようにしか考え

られないとは情けない。現在の入試制度が、いかに青少年の健全な成長を妨げているか。知能面だけでいっても、前頭葉の訓練はないがしろにされている。まして全人

冬の夜のモノローグ

大木久雄

(昭24外専卒・大学職員)

明日より

今日は

特に寒いということはない

昨日の夜より

今夜は

特に厳しいということもない

そんなことは

どうでもいいんだ

偉大な夜の沈黙が拡がる

夜

夜

夜

偉大な沈黙が拡がる

何も見えない

唯

何かがやって来る

旗 叛逆の先兵か

祭 権威の狂乱か

影法師 機械文明の落し子か

上る 上る 上る

平和 地球が欲しがっているもの

愛 人間が欲しがっているもの

夜明けは

遠くに

付んでいる

格的にとれほど歪みをもたらししているか。

有名官学の学生に神経症患者が多いのは何を物語っているのか、現行入試制度は予備校を榮えさせ、高校を予備校化させる働きをしているにすぎないような気がするのである。

私立大学の入学選考は、その大学の特色にふさわしい、いろいろの方法があつてよいと思う。百年近い歴史をもつわが同志社には、他大学には決していない何かがある。特有の伝統がある。それを生かしてこそ社会に貢献しうるのである。入学選考にも、同志社独自のものが、自ら生れ出て当然であろう。まさにガラス張りの中で、種々の選考方法を実施すればよいのである。

(昭24大経卒・文学部教授)

無題

石村雅子

昨冬以来香港かぜが猛威をふるった。服飾界の流行にはうといが、こういう時だけ

はバスに乗りおくれな。二月はじめの夜中に、はげしいのどの痛みに目を覚ましてから、この恐るべきかぜはすっかり私をつかまえてしまった。ほとんど時を同じくして母も枕を並べた。間もなく家中の者がおすそわけにあずかったのだが、他の者は幸いにも軽くおさまり、母と私二人だけが日夜ホンコン！ ホンコン！ と烈しい咳でPRにつとめた。今度のかぜは年齢の数だけねなければならぬとおどかさねながら、鼻の横に大きなカサブタのできた二月の末頃にはようやく快方に向って来た。

精神年齢の数だけで済みそうだと、その夜も子供たちを早くねかせ、気分がよいと起き出して来た母と共にテレビをみながら何だ彼だと勝手な批評をしていると、いつもあわてたことのないお手伝いさんが、例によって落着いたアルトで廊下から「大変大変、火事ですよ」という。どこかに煙でも見えるのかと、何気なく雨戸を開けると目の前が急にパッと明るくなった。庭一つへだてた真正面の家から威勢よく火が吹き出している。うなるような音を立てて、紅い煙と焔はまるで生き者のようにするする

伸びては暗い空へあざやかな火花をまき散らしている。「ああっ」と言ったきり、絶句して棒立ちになってしまった。空白の時間がとても長く感じられたがそれはほんの瞬間であつたのだらう。母が「電話」と叫んだ。私は「子供」と叫ぶとわれながら信じられないくらい早さで二階にかけ上つた。

夢中で身支度をすませると少し気が落着いて、前夜の強風が幸いおさまり、雪まじりの雨まで降り出していることに気付く。空襲で大火になると不思議に雨が降って来た二十年以上前のことまで思い出す。

待つ間もなく消防車が威勢よく到着して三方から勢よく放水する。近所の人たちが手に手に消火器を持ってかけつけ、玄関から茶の間をボンボン三、四歩で裏庭へ通りぬけ、消火活動に協力して下さる。たちまち茶の間は銀座四丁目のような賑やかさになってしまった。上の子はベソをかきながうろウロし、下の子は大よろこびでとびはねている。もう大丈夫すぐ消えるかと思いのほか、なかなか簡単にはいかない。消えるかと思えば、パッとほじけるよ

うな音と共に火力を繰り返し返し、約一間半燃え続け、一軒半を焼いてようやく鎮火した。

雨にぬれながら、「もっと水かけて、もっともっとどんどんかけて、東の屋根、東東」と活躍していた母は、翌日からまた熱を出して床についてしまった。私も二次感染というわけで連日痛む頭をかかえていると、ある朝小さな庭いっぱいにさわやかな声が響いた。半焼けた庭木にとまって、たのしげにうぐいすがのどをふるわせて啼いている。大自然の春の訪れはもう間近かであつた。

(女子大学教授・声楽)

IN GOD WE TRUST

徳永清行

貨幣学説に金属説と名目説があることは古くからの対立した見解である。金属学説の見解から表象学説的への理解に進展してきたこともわれわれの記憶に新しい。名

目説の代表ともいわれるのがクナップ (Georg Friedrich Knapp) であり、その根拠になっているところは普仏戦争における軍票の流通をめぐってであった。いわば不換紙幣のような軍票が流通できたのは国家の権威が背景になっていたとみて、ここから貨幣国定説が成立したわけである。

イタリアを代表するようい伝えられているマカロニーはその源流を中国に求められるらしい。マルコ・ポーロがそのものをイタリアに伝えたということであり、マカロニーにマルコ・ポーロの名が残ったとかいう。その真偽のはどはたしかではないけれども、つぎの事項は正確である。マルコ・ポーロの旅行記の一駒に紙幣の記録がある。元朝の時期、北京に到着しての記述であり、宝鈔という大型紙幣についてである。

スイスの紙幣収集家の所蔵の中に中国明代の紙幣が貨幣展示会で公開されて、恐らく世界最古のものではないかと評判されたがマルコ・ポーロの旅行記に載っているのはその一代前の元朝においてのものである。元代の紙幣そのものは現存していない

ようなので、明代の紙幣（一三六八一—四四）が一応世界最古といっても差しつかえないであろう。この宝鈔は手形のような性格もないではないが、紙幣としても取扱われるものであるから、中国に世界最初の紙幣が誕生したといえる。

この紙幣には流通を円滑にするためにきびしい罰則が記載されている。当時のことであるから木版であり、皇帝の御璽が朱肉によって捺印してある。流通の根源は、国家の権威であり、強制通用力が与えられた。マルコ・ポーロ (Marco Polo) はこのような不換紙幣が国家の保証だけで流通し



1ドル紙幣——上の新紙幣には IN GOD WE TRUST と印刷されている

ていたことに強く驚いて、その旅行記に特記したのである。クナップ教授がマルコ・ポーロ旅行記を読んでいたら貨幣国定説での引用に取り上げられていたことであろう。金属貨幣が進化して行く姿は、ケインズ (John Maynard Keynes) の管理通貨に現れたところであり、ハロッド (R. F. Harrod) のいう世界最大の景気調整の用器としても構想されるであろう。

ここで一顧したいのは、アメリカの通貨についてである。その一ドル銀貨における IN GOD WE TRUST の刻印については周知の通りであるが、一ドル紙幣については、元来この文字はなかった。ところが近年の一ドル紙幣（裏面）には、この文字が刷込まれている。いろいろの観察が可能であろうが、新旧一ドル紙幣を対比して、金属説とか名目説を越えて、この語句もつ意義を考えたい。神とか仏とかいう言葉を使うことを避けたいとするのが国の紙幣を取り上げて、考え込まざるを得ない昨今である。

（商学部教授・国際金融・貿易）

年賀状

長尾義三

今春もたくさんの方賀状が届き、当方から出していなかった方からの分を選び出すのが大仕事であった。毎年末枚数が多いと賀状の宛名書きも大変である。いっそ謹賀新年の頭に永代の二字を書き加えて郵政省へ永代郵便料を添えて納めたら、という人もある。虚礼廃止論も昔から言われているが、数は逆にふえる一方で全国で億をもって数え、ハイライトの売れ行きと競争している。虚礼と思えば出さねばよいので、平素会っていない人と健在を知らせあう機会である。

いろいろな意味で世話になった人へは少くとも機会があれば音信したい。もちろん札はその都度すましてあっても、それは形式をととのえたということであって、有難かったという感じは何回目までと限度があるわけではない。何事によらず今日あるの



は、きわめて遠い昔からきわめて広範囲の諸条件が揃った結果であり、一つでも必要条件が欠けていたらこうはなり得なかったのだと認識するのが感謝であり、この諸条件に程度の大小はともあれ何人かこの結果に対する意識と意志決定とが含まれていれば、この認識はその人に対する知恩と名付けられる。茶碗から飯粒をこぼすと、誰が作った米か判らなくても、価額は僅かなものでも、もったいないと感じるのはこの認識の一つである。

平素、或時は強く或時は弱く無数に知覚するこれらの意識のうち、言葉や文書で相手に告げ得る時は、それだけで形式的な義理は一応すむとしても、それで意識は消去

されるものではなく、大脳の記憶装置のドラムはかなり長持ちする。相手が誰かわからぬ時、或は死んでしまっている時など、札状を天国へ配達してもらうのはアポロ八号に頼んでも駄目で、七回忌、十三回忌など機会を設けて、相手には聞こえなくてもお構いなしにこちらの意識を再確認するのが知性の所産となっている。年賀状も相手の健在を確認し、こちらの健在も確認してもらうよい機会である。出す以上は続けるべきで、出したり出さなかったりはドカと思う。

余裕が許せば短文でも近況が載っていると想像が手伝って面談の思いがして、すでに出した先でも、もう一度ペンをとる。年賀状に限らず平素でも来信にはすぐ返事を出すようにしているの、貿易商社や為替銀行にいる知人から書信を寄越す時は、こちらからの返書は往復郵便日数日に必ず着くと決めてかかっている人がある。賀状に写真や漫画などが刷ってあるのはなお面白い。写真館を自営しているゼミ卒業生からはお手のものの写真で可愛いお嬢ちゃんの七五三の晴着姿から始め、毎年毎年成長が

目に見えて賀状の来るのが楽しみである。漫画は千支の多いが、家族の似顔やユーモア混りの気の利いた諷刺などもある。京大を出て東京で勤めている伴の家に孫が二人あるが、兄が四歳で幼稚園、弟はまだ一年未満で、壮健なのは結構だがやんちゃは人一倍で親爺を手古摺らしているらしく、今年の酉年にはここに載せたような賀状をよくした。大人の苦勞は大学主脳部だけではないようだ。

(商学部教授・金福諭)

関西における医化学の発展

柴田 幸雄

日本における医化学の開拓者古武弥四郎先生は昨年不帰の客となられた。先生の最後の弟子である私は誠に感慨無量の感でいっぱいである。昨年は明治百年目にあたるもので明治十二年生れの先生は数え年で九十歳となられた。先生の恩師は新島先生と同郷の荒木寅三郎先生であり、荒木先生の恩師

は生理学から生理化学を明治十年にはじめて独立されたホッペザイル先生であることを思いあわせるとき、歴史のあゆみの面白さをみせられた気がするのである。

この荒木先生が京都帝国大学に医化学講座を開講されたのは一八九九(明治三十二年)であり、十九世紀の最後の年でもある。このようにして出発した医化学は、他の学部からの生物化学などを合流し、生化学という名において急激な発達をしめていることは言をまたない(現在、日本生化学会は医学会に所属している)。

ことに古武先生の生涯の仕事であった必須アミノ酸であるトリプトファンの中間代謝に関する研究は、現今、遺伝生化学の発展に寄与し、分子生物学の発達をうながしたともいえるであろう。現在、大学は一つの転換期にきているとおもわれる。先生の卒業された大阪大学医学部でも、そしてまた先生の最後の奉職先である和歌山県立医科大学においてもその例外ではない。先生はすでに昭和二十年和歌山県立医学専門学校の出発にさいし、従来の大学のわくにとらわれず、基礎医学を大きく組織系(形

態系)と機能系にわけける行き方を実行せられ、また大阪大学でも大阪府立医科大学への昇格にさいし、当時の佐多先生ものべておられるごとく、改良すべき問題が数多くよこたわっているのである。

さてこの百年をふりかえるとき、いかに生化学の発展がめざましかったかということはいまでもないが、先生の一生をたどってそれをながめるとどうであろうか。まず最初の年すなわち明治十二年は塩基性アミノ酸であるヒスチジンの代謝物ウロカニン酸の発見された年であり、またファンク・鈴木のビタミンB₁発見の時期でもあった。そしてまた先生の最後の年である昨年すなわち明治百年は、チトクロームCやリボヌクレアーゼの合成の年であり、その前年ファンクはこの世を去っている。このように考えるとき、これからすすむべき家政学における生化学の重要性はあきらかであり、食物をより科学的に眺める一つの行き方として大いに検討し、家政学部においての生化学の位置づけ、そしてそのような立場からみた研究のあり方について追求していかねばならないと考えている。ホッペザイル

ルがチュービンゲン大学において生理化学教室を創設したとき、チュービンゲン城の調理場を利用したという話をおもうとき、いまあらたな大学の出版にあたり、もう一度精神的な面での整理が必要ではないだろうかと思考するものである。

(女子大学教授・生化学)

年齢の差

網島貞男

私が同志社に勤めるようになってからもう足かけ二十五年になる。私が生まれてから現在の日まで生きぬいてきた私の人生の半分より一年多く同志社に勤めていることになる。その年月をふりかえて見ると遠い昔のようでもあり、一瞬の出来事のようにもある。まさに盧生が邯鄲で見た一睡の夢もかくやと思われる。

私が同志社工専に奉職してから半年くらいたってやっと学校の内状がおぼろげながらわかってきた頃のある日の午後おそく、

何かの用件で教室へ行くと、大勢の学生が集まって何やらさわいである。窓からのぞき込むと二三人の学生がやって来て先生も中に入れという。中に入ってしばらく事の成行きを見てみると、これが校長排撃ストライキ決行の学生大会であった。しまったと思ったが時すでに遅しで、えいままよと思って意を決し、全面的に学生と行動を共にした。

戦争中に国の方針で無制限に作られた工専が戦後間もなく整理される憂き目にあったその頃、同志社においても工専は白い目で見られがちであった。こんな時期にあつて、その経営上、校長も苦勞したのであるが、その運営上で不明朗な点が多々あつて私たち若手教授はかねがね不満をいっていた矢先であつた。

ストライキは学生の中に学校側と通ずる者がいて事前に学校側にもれ、数名の主謀学生が退学になった。同時に不用の老齡教授や反校長派の先生が学生ストライキの対象のごとく事件のすりかえをされて処置され、校長の完全な勝利に終つた。私はその後校長に呼び出されたが、まだ使いものに

なると見えて首にはならなかった。したがってまだ健在で同志社に勤めている。

当時、私が学生から何の疑いもなくストライキ参加を要求されたのは、その当時の私が学生とほとんど年齢の差がなかったこと、したがって当時の学生と全く変らない考え方をしていたことに起因するのではなからうか。

当時、血気にはやっていた私に老獪としか見えなかった校長の行動も、今の私には校長もあのようになければ学校経営がうまく行かなかつたのだらうという同情的な解釈にかわっている。また当時の老教授たちのもつていた考え方もそろそろわかつて来たようである。それにつれて私の物の考え方が今の世代の学生とかなり喰いちがつて来ているだろうことが想像できる。いくら学生の身になって考えようとしてもこの年齢の差が人間の基本的な物の考え方を大きく変えてしまうであらうことを想像すると、今後の学生教育もわれわれの年代の人間には次第にその困難さを増して来るように思える。

(工学部教授)